

## 2018年5月6日（日）「栄光の横溢」

マタイ 17:1-8

1 それから六日たって、イエスは、ペテロとヤコブとその兄弟ヨハネだけを連れて、高い山に導いて行かれた。2 そして彼らの目の前で、御姿が変わり、御顔は太陽のように輝き、御衣は光のように白くなった。3 しかも、モーセとエリヤが現れてイエスと話し合っているではないか。4 すると、ペテロが口出ししてイエスに言った。「先生。私たちがここにいることは、すばらしいことです。もし、およろしければ、私が、ここに三つの幕屋を造ります。あなたのために一つ、モーセのために一つ、エリヤのために一つ。」5 彼がまだ話している間に、見よ、光り輝く雲がその人々を包み、そして、雲の中から、「これは、わたしの愛する子、わたしはこれを喜ぶ。彼の言うことを聞きなさい」と言う声がした。6 弟子たちは、この声を聞くと、ひれ伏して非常にこわがった。7 すると、イエスが来られて、彼らに手を触れ、「起きなさい。こわがることはない」と言われた。8 それで、彼らが目を上げて見ると、だれもいなくて、ただイエスおひとりだけであった。

### 【序論】

今日の箇所を学んでおまして、ある注解者が次のように言っているのが目に留まりました。

「御国の民は、毎朝目を覚まして十字架のイエスを仰ぎ、毎夜再臨のキリストを待ち望みながら、目を閉じる。」（中澤 p. 525）

ここでは、主イエスを正しく認識するためには「十字架（の神学）」と「栄光（の神学）」の両面を見なくてはいけないということが言われています。十字架が受難を表していることは誰にでも理解できるでしょう。主イエスが「苦しむメシヤ」であることを知らずに、読者は聖書を閉じることはできません。では、栄光とは何かと申しますと、主イエスが神の子としての本来の姿に輝き、誰もがそれを認める日が来る。これは再臨によって明らかにされるのですが、実は、主イエスの栄光とは元来天地創造の時から現れていたのです。すべてを「良きもの」としてお造りになった神として、その素晴らしさが証しされていた。ですから、イエス・キリストを理解する上で第一に覚えなくてはならないことは「栄光」の側面であると思います。受難はもちろん極めて重要ではありますが、栄光の一部であり（十字架は栄光の極み）、30年という短い生涯の中で起きた特別な出来事でした。

## 【本論】

今日の箇所では、本来神の子として持つておられた主イエスの栄光が、数名の弟子たちの前で現れてしまう。人々の前で隠されていた栄光が溢れ出たのです。この特殊な記事を扱ってまいります。

### 本論 1. 栄光の回復

それから六日たって、イエスは、ペテロとヤコブとその兄弟ヨハネだけを連れて、高い山に導いて行かれた。(17:1)

「六日たって」と細かい日数の描写があります。これは、ピリポ・カイザリヤにおけるペテロの信仰告白、そして主イエスの受難予告があつてから六日という意味でしょう<sup>1</sup>。この六日間、主は弟子たちにご自分が如何なるメシヤであるかを繰り返し教えておられたに違いありません。一週間に亘って言葉による教育がなされた。主の受難について最初は半信半疑で聞いていた弟子たちも、これは固い決意に基づく言葉だと分かってきたと思われまふ。そこで、主は御霊に導かれたのでしよう、三人の弟子を連れて「高い山」に登って行かれました。

「高い山」がどこであったかについては諸説あります。ピリポ・カイザリヤに近いヘルモン山か、ガリラヤのタボル山か。いずれにせよ聖書全体を見ると、誰かが山に登る時には決まって神の啓示があります。

主は三人の弟子を選んで連れて行きましたが、ペテロ、ヤコブ、ヨハネは主イエスとの特別な関係にあつた人たちです。彼らは主イエスにとっての重要な局面に繰り返し立ち会うことになる(26:37、マルコ 5:37)。主がなぜ十二人全員を連れて行かれなかつたのか、その理由は書かれていませんが、幾つか考えられます。まず、大勢が主の変貌を見てしまうと、必ず誤解する者が出てくるということです。驚くべき主の姿を見て、「神の子ここにあり」と誤った形で宣伝を始めていってしまうかも知れない。また、主は「二人または三人の目撃証人」を立てるために(申命 19:15)、信頼の置ける弟子を選んで連れて行かれた可能性もあります。



そして彼らの目の前で、御姿が変わり、御顔は太陽のように輝き、御衣は光のように白くなった。(17:2)

<sup>1</sup> ルカでは「八日」となっていますが(ルカ 9:28)、恐らく最初と最後の日を入れるかどうかの違いだと思われまふ。

「変わる」(μεταμορφώω) という動詞は、イメージとしては <sup>さなぎ</sup> 蛹 から <sup>ふか</sup> 成虫 に 孵化 する様子を表すような言葉ですが、ここでは主イエスの内に隠されていた本来の栄光が溢れ出たと見るべきでしょう。

私たちの日常においては、神の栄光の輝きをこの目で見るという経験はほとんど望めませんが、御言葉に打たれ、罪を知って崩折れる時などに、その一面(神の聖さ)を垣間見る時があります。それは逆さまの発想かも知れませんが、自分の汚れに気づく時に神の本来的御心(栄光)が見えてくるということです。私たち自身が栄光を失った存在であること、本来神が人間に与えてくださった栄光からかけ離れたところにいることを知るのです。元々、神は人間を全被造物の管理者、ご自身の代理として、栄誉ある位にお立てになりました。それが聖書の第一の人間観です。

人とは、何者なのでしょう。あなたがこれを心に留められるとは。人の子とは、何者なのでしょう。あなたがこれを顧みられるとは。あなたは、人を、神よりいくらか劣るものとし、これに栄光と誉れの冠をかぶらせました。あなたの御手の多くのわざを人に治めさせ、万物を彼の足の下に置かれました。すべて、羊も牛も、また、野の獣も、空の鳥、海の魚、海路を通うものも。(詩篇8:4-8)

人類は今でもその役割を担う存在ではあるのですが、その治め方は著しく歪んでいます。神に与えられた知恵が乱用と搾取のために用いられてしまうのです。その結果、環境汚染や生態系の危機が生じる。

一例としまして、私たちが日頃飲んでいる牛乳にまつわる問題を挙げてみましょう。最近、食品にまつわる倫理的な問題に関心がありまして、調べることがあります。

「人間と同じで、牛の乳も子供を産まなければ出ません。牛の繁殖はほぼ 100%人工授精でおこなわれています。乳用に飼育される牛は、生後 13~16 ヶ月で初めての人工授精が行われます。10 か月の妊娠期間を経て、出産、搾乳がはじめられます。より効率よく乳を搾り取るために、出産後 1~2 ヶ月で次の人工授精が行われます。雌の牛たちは、人工授精→妊娠・出産→搾乳→人工授精→妊娠・出産・・・と繰り返されます。分娩前の 2 ヶ月ほどの幹乳期間を除いて、乳用の牛はずっと乳を搾り取られていることとなります。牛の寿命は本来 20 年ほどですが、牛乳のために飼育される牛たちは、乳量が少なくなり生産性がおちる生後 5, 6 年目に出荷され、屠殺されます。」<sup>2</sup>

これは一例に過ぎませんが、人間が動物に対してやっていることの代表と言えるでしょう。私たちもその牛乳を飲み、牛肉を食べている訳でありますから、無関心ではられません。豚にしても鶏にしても、人間の生活のために本来の本能的なあり方からかけ離れた飼育がなされているという現実があるのです。

---

<sup>2</sup> <http://www.hopeforanimals.org/dairy-cow/227/>

今の時のいろいろの苦しみは、将来私たちに啓示されようとしている栄光に比べれば、取るに足りないものと私は考えます。被造物も、切実な思いで神の子どもたちの現れを待ち望んでいるのです。それは、被造物が虚無に服したのが自分の意志ではなく、服従させた方によるのであって、望みがあるからです。被造物自体も、滅びの束縛から解放され、神の子どもたちの栄光の自由の中に入れられます。私たちは、被造物全体が今に至るまで、ともにうめきともに産みの苦しみをしていることを知っています。

(ローマ8:18-22)

ですから、ここで主イエスの栄光が輝き出したという出来事には、創造論的、終末論的意味合いが含まれていると言えるでしょう。神は天地創造の時にすべてを「良きもの」としてお造りになりましたが、その全被造物の栄光が取り戻される日が再びやってくる。それが主イエスの再臨の時なのです。聖書は天地創造に始まり、新しい創造に帰っていくという構造になっています。主イエスはその創造の主として世に來られ、弟子たちの前に栄光を現されたのです。

## 本論 2. モーセとエリヤ

しかも、モーセとエリヤが現れてイエスと話し合っているではないか。(17:3)

この度の三人の弟子を引き連れての登山には「祈り」という目的があったようです(ルカ 9:28)。しかし、主イエスが祈っておられると、弟子たちは眠り込んでしまう。

ペテロと仲間たちは、眠くてたまらなかったが、はっきり目がさめると、イエスの栄光と、イエスといっしょに立っているふたりの人を見た。(ルカ 9:32)

ここでなぜモーセとエリヤが登場するのか。端的に申しますと、モーセは律法の代表として、エリヤは預言者の代表として現れたと考えられます。旧約聖書全体が「律法と預言者」と表現されることから、彼らは旧約聖書の代表として、そのすべてを成就するキリストと謁見したと言えるでしょう。

この二人の人物は「苦難を負った」という意味においても、主イエスとの共通点を持っています。モーセはイスラエルの民をエジプトから導き出すに当たって、民から理解されず、多くの反逆に遭いました。また、エリヤはたった一人でバアルとアシェラの預言者と戦い、その勝利の結果、王妃イゼベルに命を狙われるという経験をしました。この両預言者の苦難もまた、主イエスの受難を予表していたのです。

ここで三者が話し合っていたことを、ルカは「イエスがエルサレムで遂げようとしておられるご最期について」と説明しています(9:31)。ここで使われている「最期」という言葉は「ἔσχατος」で、モーセが導いた出エジプトと同じ意味合いを持ちます。つまり、主

イエスの死と復活は「新しい出エジプト」であり、イスラエルの民が奴隷生活から解放されたことと、人類が罪から解放されることとが相似的關係に置かれているのです。私たちが罪から解放されるためには、主イエスの受難がなくてはならない。人類が罪から解放されると、被造世界の解放も起きる。人間においても、被造世界においても、栄光の回復が待ち望まれているのです。

すると、ペテロが口出してイエスに言った。「先生。私たちがここにいることは、すばらしいことです。もし、およろしければ、私が、ここに三つの幕屋を造ります。あなたのために一つ、モーセのために一つ、エリヤのために一つ。」(17:4)

ペテロはなぜこんなことを言い出したのでしょうか。ルカ 9:33 によると、彼は「何を言うべきかを知らなかった」ようであります。幕屋を造るという発想が出てきたことを考えますと、どうも彼は主イエスとモーセとエリヤをその山に留めておきたいと思ったようです。古代中近東においては、大切な客人には敬意を払って宿泊のための幕屋を建てる習慣がありました。彼は今日の前で起きている霊的出来事に感動し、いつまでもこれが続くようにと願ったのです。ところが。

彼がまだ話している間に、見よ、光り輝く雲がその人々を包み、そして、雲の中から、「これは、わたしの愛する子、わたしはこれを喜ぶ。彼の言うことを聞きなさい」と言う声がした。弟子たちは、この声を聞くと、ひれ伏して非常にこわがった。(17:5-6)

これは父なる神様による、ペテロの提案に対する「ノー」です。ペテロの発想が意味したこととは、やはり主イエスには十字架の苦難など経験してもらわずに、この栄光の姿のまま人々の前に現れてほしいというものでした。彼が主の使命をまだ全然理解できていなかったことを物語っています。それに対して、父なる神様は「黙れ」とお命じになったのです。

「これは、わたしの愛する子、わたしはこれを喜ぶ」とは、主イエスの受洗の時にも出てきた表現です(3:17)。父なる神様が主イエスをこのように呼ばれる時はいつも、主の受難が関わっている(バプテスマも)。つまり、「お前たちは黙って、イエスの決意に聞き従え。十字架の道を妨げるな」と言われたのでしょうか。

すると、イエスが来られて、彼らに手を触れ、「起きなさい。こわがることはない」と言われた。それで、彼らが目を上げて見ると、だれもいなくて、ただイエスおひとりだけであった。(17:7-8)

幻から醒め、弟子たちは主イエスが共におられることを改めて確認しました。主イエスは仲保者として弟子たちの側に立ち、ご自分の栄光を纏まとわせ、神の御前に立てるようにして下さるのです。

## 【結論】

今日は主イエスの「栄光」に焦点を当てつつ、「受難」を見ました。私たち人類は、罪を犯したため、本来与えられていた栄光が失われています。私たちはそのままでは輝くことができず、この地上のあらゆるものを破壊する歩みを続けていくでしょう。しかし、主イエスは私たちにご自身の栄光を着せ、本来の人間性を取り戻させてくださる。そして、この地を正しく管理する者へと近づけてくださるのです。再臨の日にはすべてのものが回復するでしょう。そして、主イエスに着く者には栄光が取り戻され(義の衣、栄光のからだ)、永遠に神と共に生き、神の造られたすべてのものを正しく管理するようになるのです。この地にあって贖われた者は、既にその歩みを始めている。私たちは主イエスと共にあるならば、月が太陽によって光を持つように、輝くことができるのです。

## 【祈り】

万物の造り主なる神よ。あなたは私たち人間を、神に似た者として造り、地の管理者としての使命を与えてくださいました。そして、そのための知恵をも備えてくださいました。しかしながら、私たち人類はその知恵を正しく用いることができず、被造世界を苦しめています。主イエスとその栄光の内に来られたことは、やがてこの地が回復させられることの約束でした。私たちを罪から贖い、あなたが望まれる世界を取り戻していくための働きをなさしめてください。私たちを「地に平和」をもたらす者へと造り変えてください。

## 【祝祷】

仰ぎ願わくは、  
すべてを良きものとして創造し、被造世界を通してご自身の栄光を現し給うた、父なる神の愛。

罪によって「地の管理者」としての栄光を失った人類に、義の衣を着せ、回復の使命を与え給いし、主イエス・キリストの恵み。

再臨の主を待ち望ませ、キリストの光で輝く人生を歩ませ給う、聖霊の親しき交わりが、あなたがた一同の上に、限りなくあらんことを。